
命（ミコト）檻の中の虎

かよきき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命ミコト 檻の中の虎

【コード】

N9483I

【作者名】

かよきき

【あらすじ】

獣や植物と放せる不思議な青年ミコトの旅の物語

言葉

林檎、蜜柑、瓜。

魚に干し肉。

着物にわらじ・・・

市場はザワザワと賑わっていた。

着ている着物が違う所を見ると民族がバラバラのようだ。

そんな中に一人、変わった品を売るものがいた。

「毒　毒はいらんかね　毒と言っても体にいい毒ですよ」

”毒”と書かれたノボリを横にさし地面に敷いた風呂敷には、貝の中に入った得体のしれないクリーム状のものや、小さな壺が沢山ならんでいる。

しかし、客は全く立ち止まらない。

主人は大きなため息をついた。・・・ん？

この主人・・・ミコトだ。

「はあ　ダメだ　全然売れない。　ただでさえ説明がある商品なのに言葉が全く通じないとは・・・」

ぐううう　と腹が鳴る。

「お腹減った。　あー　大陸なんて来なきゃ良かった」

そう呟くと、ガツクリと首を垂れた。

その時、誰かがミコトに話しかけた。

「是不是賣著？毒？」

ミコトが顔を向けると、その中老の男は長いひげを親指と人差し指で延ばしながら、ペラペラとどこかの言葉でまくし立てている。

「想其實使用毒殺死動物、想用儘可能不感到痛苦的毒殺」

ミコトは全く言葉の理解が付かない。だが客であることは確かそう
だ。千載一遇の好機とばかりに負けじと売り文句を並べ立てた。

「これはどうです。」絶対発毛毒” これもうオススメです。 3
ヶ月くらい凄い激痛が遅いますが、4ヶ月目にはフサフサですよ！
わかるー？ フーサ フーサ」

ミコトは発毛毒と書かれた壺を片手に持ちながら必死に発毛の表現
をした。

だが、中老の男は怪訝そうな顔を見ると、突然ミコトの腕を掴んだ。

「來。」

「はい？ え？ なんですか？ 私、何にもしてませんよ。 ちよ
つとー！！」

ミコトは商品を何とか片手でクシャクシャにまとめ、男に引っ張ら
れていった。

大きい猫

連れていかれたのは市場の外れにある布張りの建物だった。何人かの従業員らしき人たちが、中老の男とミコトが来ると会釈した。どうやら、この男はこの建物の偉い人のようだ。

ミコトは迷惑そうに口を尖がらせて引つ張られるがまま、その建物の中に入った。

「わあ！」

ミコトはつい、驚きの声を発していた。

「でっかい猫!!」

そこには大きな檻に何尺もある大きな猫が、横たわっていた。その大きな猫は目も開かずポツリと呟いた。

『けつ。田舎者め。 ” 虎 ” も知らんのか』

その言葉を聞いて、ミコトが檻に近づいた。

「へー あなたがあ有名な ” 虎 ” ですか!! 初めて見ました
ふーん」

大きな猫、もとい虎は目を見開きミコトをその大きくて怖そうな目つきで睨んだ。

『!?!? お前、虎語わかるのか』

「はい。初めまして ミコトと申します。 海を渡った国から来

ました」

そう虎に挨拶をしていると中老の男がミコトの腕を再び掴み、虎を指差しまた言葉をまくしたてた。

「這個虎不感到痛苦殺」

「え？ は、はい？ えっとあの」

ミコトは、もう何が何だかわからずオドオドして困った顔をした。その様子を虎はじいっと見ている。

「何だお前、虎とは話せて人とは話せんのか」

「はぁ どうも大陸の言葉は難しく、それにこの人、一方的だし、強引なんです」

虎はまた目を閉じて、ふーっと大きくため息をついた。そして薄め開けて言った。

『「お前、毒屋だろ？ 苦しめない毒で、この虎を殺してくれ」・・・と言っておるのだ。』

ミコトは驚いて青ざめて振り返った。

「はぁ！？ 無理。っていうか嫌です！！ 無理って言うてくださいー！！」

『言えるか。俺は虎だぞ』

虎はまるで他人事のように冷静に言った。

ミコトは困って男に全力でお断りをしはじめた。

「無理です！ 拒否！！ ああ もう話のわからん人だなあ」
腕をバツテンにするなど、色々試みているが、まったく伝わってる様子がない。

こうなればも、逃げるしかない。 ミコトは自分の荷物を崩れないように抱え込み出口に向かって走ろうと一歩踏み出した。

その時だった。

『いいんだよ』

檻の中の虎は眠そうに目を閉じアゴを地面につけたまま言った。

『俺はこの見せ物小屋の芸虎だ。昔は人気を博し芸で観客を魅了したもんだ。だが俺は老いた。芸に集中出来なくなり、最高の技を客に見せることも出来なくなった。体も大きくなりすぎ。重くなり前ほど機敏に動けない。こんな様子で芸を見せるのは私の誇りが傷つく。』

だから、何日も前から演技を拒否したのだ。演技をしない動物など見せ物小屋にとっては無用の長物……解るだろう？』

ミコトは虎の前でしゃがんだ。

「そんな、調子が悪いだけかもしれないよ」

『いいのだ』

虎はその大きくて重そうな頭を上げミコトの目を見て話した。

『虎は誇り高い種族。自分の死は自分で決める。』

ミコトはついに檻に手をかけ虎に顔を近づけて言い返した。

「そんな！！ 芸の引き際が死に際なんて聞いたことありませんよ」
『どのみち、体が動かなくなれば殺されて食べられるのがオチよ。』

虎はその狭い檻の中で頭を下げた。

「……頼む……」

虎の強い決意にミコトにはもう何もかける言葉がなかった。

ミコトは風呂敷の中から、ごくごくそと小さな小石のような形の物を取り出した。

「これを。 一番苦しめない毒です」

「すまない……ミコト……」

虎その大きな口から長い舌べろでその小石状の毒を飲み込んだ。

そして、ゆっくりと体制を変え、頭を横にした。

虎の意識がだんだんと遠くなる。

納得したような顔をして、虎は意識を失った。

空

ガラガラガラ・・・

体に振動を感じ、虎は意識を取り戻した。

薄目を恐る恐る開ける。

眩しい！

虎は強い光の刺激に再び目を閉じ、またゆっくりと目を開けた。

空だ。

光の正体は太陽だった。檻の中で何年も暮らしてきた虎にとって、空を眺めることはとても久しぶりのことだった。

ゆっくりと太陽のまわりを雲が流れている。

『な・・・なんだココは・・・俺は生きているのか!?!』

虎は自分の体を確かめたが、何ともない。だが揺れていた。

虎は荷車に乗っていたのだ。それも檻に入れられているわけでも、縄で縛られているわけでもない。

「よく眠りましたね。もうお昼ですよ」

荷車を引きながらミコトが顔だけ虎の方に向け挨拶をした。

虎を乗せた荷車はガタガタの山道を進んでいた。

ミコトは虎を仮死状態にする毒を飲ませ、中年の老人から死んだと思わせた虎と”絶対発毛毒”を交換したのだ。

「かなり南の土地なんですけど、野生で虎が住んでいる森があるっ

て、さつきペンペン草さんから聞きました。私も旅のついでです。そこまでお付き合いますよ」

『森!?!』

”森”という言葉聞いて虎の目がキラッと光った。

しかし、すぐに虎は視線を下に向けた。

『おせっかいな人間だな、お前は・・・私がそれで礼を言うつもりも思っているのか?』

虎は荷車の上で不機嫌そうに耳を後ろの方に向けた。

ミコトは瞳だけを虎の方に向けた。

『この歳で野生でやっていけるわけがないだろう? 狩りの仕方すら知らんだぞ。飢え死にがオチだ』

虎の言葉にミコトは口をつぐんだ。

自分の考えが足りなかった事を悟った。

『だいいち。私は生肉には興味がない。きつちり調理さて絶妙に味付けされた物でなければとても食べる気にはなれん』

ミコトは無言で荷車を引き続けた。

やがて一面に田園風景が広がる平坦な道に出た。

脇には小川が流れトンボがスーッと飛んでいった。

「そつだ!!」

ミコトは何か思いついたように、山に向かう道を曲がり、その田園を管んでいる農家集落の方向に向かった。

ただ生きる

「ごめんください!!」

ミコトは農家の家の戸を叩きながら挨拶をした。

ガタガタと中から音がして、ご飯でも食べていたのか若干、口を動かしながら家の主人が出てきた。

「家畜が獣などに襲われ困っていませんか？ そんなあなたに朗報があるんです!!」

ミコトはそう言うと、一歩下がり手で後ろにいる荷車に乗った虎を紹介した。

「この虎がいれば大丈夫!! どんな獣でも震え上がって近づきませんよ!」

「比!!」

主人は悲鳴を上げて大慌てでピシヤツと、戸を閉めてしまった。

「あ! ちょっと・・・」

虎は冷ややかな目でミコトを見た。

軽く舌打ちをするとミコトは、近隣のお宅までまた、荷車を引きながら虎を紹介して回った。

一人は家の中から、チラツと虎をみただけで、まったく戸を開けない者。

クワを持ってミコトに襲いかかろうとする物。

一人は地面に頭を付き、頭の上で拝んで許しを乞うてきたりした。

あまりの拒否っぷりにミコト困りはてた。

「うーん 困った。 なかなか理解してもらえませんかー。 言葉の壁は思いなあ。」

閉められた戸の前で腕組みをして立ち尽くし考えをあぐねているミコトの後姿を見て虎は言った。

『もういいって』

「え でも！」

ミコトが振り返ると虎は荷車からゆったりと降り、久しぶりの地面をかみ締めた。

そして、改めて外の空気をいっぱいに吸い込みゆっくりと吐き出す。空を見て雲の流れる様を眺めた。

『普通の人間が虎と住める度胸があるわけないだろう。それに、これ以上・・・人に媚を売って生きていたって何の意味がある？ 私にも少しは虎としての誇りがあるのだ』

ミコトは頭をかしげて唸った。

「うーん。 その辺が実はよくわかるんです。 媚とか誇りとか・・・」

虎はギョロつとその大きい目をミコトに向けた。

「私は”おむすび”が大好きです。 この先も沢山の”おむすび”を

食べたい。それから花を見るのが好きです。花の周りにいる虫も好きだし、風の匂いをかくのも大好きです。」

風の匂いをかいでミコトは微笑んだ。

「生きています。ただそれだけで、私は幸福なんですけどねー」

虎は何か珍しいものを見るようにミコトを見た。

こんな人間を初めてみたからだ。

今まで見てきた人間は金のために生きたり、家族のために生きたり、夢のために生きたり、目的のために生きていた。

だが、ただ”生きる”ために生きている人間は会ったことがなかった。

あまりに変で力が抜けてしまい、すこし笑って言った。

『ふ……お気楽な奴だな。　　どのみち生きる術がなければ同じ

事だろう』

「うーん　そうですねー」

また悩み始めるミコトの視界に、ふと田園で田を耕す牛が入る。

ニヤリと笑うと虎の方を見た。

暖かな布団

「さあ 寄つてらっしゃい！ 見てらっしゃい！！ ここに居るのはそんじょそこらの虎にあらず！！」

集落の広場の辺りに陣取ったミコトは辺りの人を集めるべく大きな声で売り文句を喋り続けた。

何事かと集落の人間が眉をひそめながら序々に集まってくる。

ミコトはある程度集まったかと思届けると、今度はパンパンっと大きく手を叩いた。

すると田を耕す道具を虎が付け、ミコトが後ろから耕し始めた。

虎は牛ほどの力が持続的に出るわけではないが、一生懸命道具を引いた。

「なんとこの虎！！ ある雑技団で大人気だった優れ者だ！！ どんな農作業だつてすぐに覚えちゃうし。おまけに人間の言葉も理解できちゃう凄い虎だよ！！」

ミコトと虎の動きを集まった人々は無言で凝視している。

（こんな形で嫌々、やってきた芸の”覚える”能力が役に立つとはな）

虎は道具を引きながら微かに笑った。

「どうか皆様！！ 是非 この虎の世話を見たいという方、どうぞ、前のほうに！！ どうぞ、どうぞ！！」

ミコトは作業を止め虎の首に腕をまわしながらもう片方の腕で前の方に人々を誘導した。
そつする集まった人の中から一人、クワを持った男がずいっと前に出てきた。

「早点儿从？个村出去！ 与虎和人一起不能居住？！！」

男がそう言つと、他の人々まで一斉に言つてきた。

「？ 出去！」

「？ 出去！」

「？ 出去！」

ミコトは大陸の言葉が全くわからない。

きつと、喝采を受けもう一度今のことをやって見せるとか言っているのだと思つていた。

しかし、虎の表情違つていた。

ずっと人間と暮らしてきた虎には大陸の言葉もそして、その意味も良くわかつていた。」

悲しそうな目で虎は、地面を見た。

残る道は一つしかない。

さつきミコトが言つていた、他の虎の棲息する森に行つて野生に戻ることだ。

しかし、生まれたての赤ちゃんから檻の中で暮らしてきた虎にとつて、それはもう飢え死にを待つ死刑と一緒にだった。

その時だった。

どこかの民家の鶏が飛び出して、柵から逃げた。

半分飛び、半分走つて、街道の方に向かう！

「我的?!」

誰かが鶏を見て叫んだ。

ドドツ!!

虎がまるで突然本性を現したかのように、鶏の方に向かって走り出した。

ミコトはビツクリしてただ茫然と突っ立っていた。

あれよあれよと言う間に虎は鶏に追いついた!

バクリ!!

虎は勢いよく鶏に噛み付いた。

遠目でよく見えないが、あれでは鶏もひとたまりもない。

人々からは悲鳴まで出た。 恐ろしさのあまり、目を伏せるものもいた。

「と……虎さん?」

ミコトはポカンと虎の行動を見続けていた。

虎は踵かかとを返すところの方の方向にゆっくりと歩いてくる。

次は自分のせいだとばかり人々は散り散りになって逃げ始めた。

だが虎もまた歩速を早め、人を追った。

そしてさつき「我的?!」と叫んだ男の行く手にバツと身軽に立ちはだかった。

男は恐怖で動けない。

人々は遠目から男と虎に集中した！
虎の大きな口が男の目の前で開かれた！！

次の瞬間、人々が観たものは

鶏だった。

虎は食べてしまったはずの鶏を口から出した。

鶏には傷一つ付いていない。

男は何が起こっているのかわからずその場でしゃがみこんでしまった。

鶏も鳴きもせず、くちばしを開いて茫然としている。

虎はそうすると、またゆっくりと翻し、ミコトの方に戻った。

『行こう。ミコト。もういいんだ』

「虎さん？」

虎は何も言わずミコトの横を通り過ぎ、この集落に入ってきた道の方に向かって歩いていく。

ミコトはよく理解できぬまま虎の背中を見た。

その悲しげな背中に、ミコトは何も言わずついていく事にした。

「？等候」

その時、さつきクワを持って人々の先頭で、虎とミコトに最初に文句を言った男が声をかけた。

「是真的不可思？虎・・・完全是人！」

「本当に変な虎だなあ・・・まるで人間だ！」

ミコトは言葉の意味がわからず、目を瞬かせた。虎は振り向かずただ足を止める。

「？住在我的家。被大量不？予肉」

「ウチに来るかい？ 滅多に肉なんか食わせてやれんがな」

ミコトはあわてて虎の背中をゆすって聞いた。

「と、虎さん なんて言ってるんですか？」

虎は少し振るえながら目をつぶり言った。

『生きて・・・いいってさ・・・』

「ほ・・・本当に？ 本当に?!」

ミコトは涙を貯めて何度も聞いた。

虎はミコトの頬をベロベロと舐め、そして、そう言った男の方に歩いていった。

グルグルと大きく喉を鳴らして・・・

その後、ミコトは心配で何度もこの集落をこっそり訪れているらしい。

元々、歳老いていた虎は、それからそこまで長生きはしなかった。

だが、虎が生きているあいだ、その集落では一匹のイノシシも狼も出ず、

。 作物は実り豊かであり、人々の笑顔の中に虎はいつもいたと・・・
まるで人間のように、家の中のあたたかな布団の上で最期を迎えたと聞く。

< 終わり >

暖かな布団（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

感想など頂けたたら、ひっくり返って喜びながらムロロロ言いつくら
い喜びますので

是非、お寄せください。

ありがとうございます。

ミコトの旅はまだつづきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9483i/>

命（ミコト） 檻の中の虎

2010年10月12日05時43分発行